



大学評価・学位授与機構の分野別研究評価について



医学研究科・医学部は大学評価・学位授与機構（以下「機構」という。）の平成12年度着手の分野別研究評価「医学系（医学）」を受けた。

その評価結果が「医学系（医学）」研究評価報告書として本年3月20日に機構から通知され、また社会に公表された。既に各分野にもお届けしましたが、それは17000字以上に及ぶもので機構のホームページ (<http://www.niad.ac.jp/>) にも掲載されています。

この評価は“する側”“される側”にとっても最初の経験であり、とまどうこと多くありました。機構も事前説明会でも“進化する評価”と述べていました。

この度、医学研究科広報にその過程につき報告します。

評価はまず5年間の目的・目標を作成する事から始まりました。これは遡っての計画の設定があったとの想定で、昨年4月末に計画書を提出しました。機構からはそれを了承し、報告書を作成・提出する様にとの指示が昨年5月中旬にありました。

早速、評価書の作成にとりかかりました。数名の教授が担当委員となり、どの様な評価を行うかを多くの時間をかけ検討・決定し、全教官にその内容を伝えるための説明会を昨年6月20日と28日に開催しました。7月4日を締切りの目標として、すべての対象教官である医学研究科・医学部・附属病院の257名に個人別活動判定票、また56の研究グループ（分野別）に研究グループ別活動判定票を提出していただきました。その総計は約1200枚になりました。それをもとに自己評価書を作成しました。評価書は83頁の本文と附表12から成ります。また根拠資料として33点を添付しました。

医学研究科長・医学部長 西 信 三

昨年7月末日の締切りまでにダンボール箱で15ヶを機構に無事に届ける事が出来ました。

この作業量は想像を越したものとなり事務職員の方々に勤務時間外（時には午前3時まで）のみならず休日出勤で作成に協力していただきました。また、同時期に締め切りとなる医学研究科修士課程の設置と医系総合研究棟の概算要求の提出とも重なったため、担当の掛のみでなく、事務全体としての御協力をいただきました。

機構により設定されたヒアリングや他の意見を述べる機会、また国立大学協会のこの評価に関連する会議やアンケートなどの機会に、私どもも評価に対する意見を述べてきました。それらに関連するものとして以下の2文を転載します。

① 国立大学協会 第8常置委員会 佐々木 毅 委員長談話 平成14年3月22日

「この度 大学評価・学位授与機構（以下、「機構」）の大学評価の結果が初めて発表されました。ここに至るまでの機構、および評価活動に参加された各方面の専門家の方々のご努力に敬意を表します。

いうまでもなく国立大学は国民の信託に応えて、自らの教育研究活動を常に厳しく自省し、活性化を図る努力を不断におこなわねばなりません。そのため大学の外部からの公正で厳格な評価を受けることはきわめて重要であり、そうした観点から機構の評価活動にも国立大学は積極的に協力してきました。各大学が評価への準備対応に要した時間は、全学テーマで690時間、分野別教育で510時間、分野別研究で481時間にあたるとのアンケート結果もでているところです。今回の評価の結果についても、全国99国立大学は真摯に受け止め、これから自己改革に活かすために努力する所存です。

ただし今回の評価は、評価する側の機構にとっても、評価される側の大学にとっても全く初めての経験であり、その過程で様々な問題が生じたことも事

実です。たとえば評価の対象領域によって評価の基準が必ずしも統一されているとはいえない、また評価担当者の間に評価の理念、方法について十分に共通の理解が形成されていない、などの指摘が大学側からなされています。今後この評価報告書を各大学がよく検討し、これらの点について意見を述べる必要がある場合は、必要な対応をとらせていただくつもりです。

したがって社会の各方面におかれては、今回の評価結果はあくまで試行の一過程であることを念頭に評価結果の解釈については慎重を期されるようお願いするものです。先のような指摘のある評価結果が一人歩きして社会に流通するような事態が生ずることになれば、大学側にとって遺憾であり、今後の大学評価活動に支障を生じる可能性があります。

それは評価基準についての相互了解にもとづく大学評価という本来の趣旨に反する事態であるだけではなく、ひいては大学の知的エネルギーそのものを閉塞させることになります。

また機構に対しては、評価活動の形式的な完成を急ぐあまり、画一的、形式的な評価に陥ることのないように改めて要望します。大学の自主性や個性を十分に活かした評価方法こそが、現在の日本に必要とされているダイナミックな知的創造力を育むことにつながると確信するからです。そのためには、未だ試行過程にあることを念頭に、今回の評価の経験を柔軟に見直し、機構と大学が協力しつつ「透明で進化する」大学評価を形成することこそが必要だと考えます。」

② 機構は前述の評価書と共に「平成12年度着手の大学評価の評価結果について」という16頁の通知を出しています。その冒頭は以下の通りです。

「大学評価・学位授与機構（以下「機構」という。）では、平成14年3月20日に、平成12年度着手の大学評価の評価結果を確定し、評価報告書として、評価の対象となった国立大学及び大学共同利用機関並び

に設置者である文部科学省に提供するとともに、広く社会に公表した。機構は、平成12年4月に学位授与機構からの改組により設置されたが、平成12年度から平成14年度中の着手までを段階的実施（試行）期間として、取り組むべき評価の全体的な構図の下で大学評価を実施してきており、今回が最初の評価結果の確定、公表である。

評価報告書は、対象期間（組織）ごとに個別に作成されており、全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）112機関、分野別教育評価（「理学系」及び「医学系（医学）」）25組織、分野別研究評価（「理学系」及び「医学系（医学）」）12組織、合計149機関（組織）の報告書がある。

ここでは、機構の評価に課せられた使命や評価法と評価結果の全般的な状況について解説し、また、評価の実施を通じて認識された課題等について記述している。」

医学部・医学研究科では平成3年より毎年自己点検評価書を公表しておりその総頁は昨年で3740頁に達します。また、平成10年には外部評価を受けその報告書も公表しております。今回の機構の評価でもこれらの活動は高く評価されていますが「この報告書を研究のアクティビティーに着目して年次を追って見てみると、個々の研究者間の差に大きな変化が見られない。報告書の出版が、活動状況の把握にとどまらないよう、研究業績が十分にあがっていない研究者に対するフィードバックの方法について再考し、活動状況の点検、そして改善につながるものとなるよう、工夫を期待する。」という記述もあります。評価書の指摘を改めて医学研究科のさらなる発展ないし法人化後の中期計画・目標の策定に活用されるよう期待します。

追記) 8月15日付で機構より「平成12年度着手の大学評価に関する意見と大学評価・学位授与機構の対応について」とする14頁の文書が評価の改善のために発表されて（ホームページにも掲載）いる。

第41回医学展を振り返る

第41回医学展実行委員長 医学部5年 木佐健悟

去る6月8日（土）、9日（日）に北海道大学医学部の恒例の行事である「医学展」が今年も開催されました。医学展とは、北大祭の開催期間に医学部として参加するもので、北大祭にはなくてはならない存在です。医学展に向けて、まだ雪の積もっている頃、5年生（80期）を中心に実行委員会を組織し、準備

を進めてきました。ちなみに、今年のテーマは「『からだ、知つ得。』～となりの医学」でした。

当日は晴天にも恵まれ、土曜日には約2000人、日曜日には約900人に来場していただくことができ、無事終了することができました。それでは、簡単ではありますが、当日の様子を紹介したいと思いま



す。

医学展の中心となるのは、毎年恒例の「医学生と市民による検査体験会」通称「市民検」です。検査の体験を通して市民の皆さんと交流する企画です。心エコー、腹部エコー、心電図、神経内科、呼吸機能検査、眼底写真撮影、アルコールパッチテストなどのコーナーを設け、1年生から6年生まで、大勢のスタッフが参加しました。用意したパンフレットが早いうちになくなってしまうほど大勢の来場者がありました。

今年はいつもの市民検のメニューに加え、「限定企画2002」として、市民講演会の内容に合わせて、土曜日に聴力検査体験、日曜日にスポーツ医学メダカルチェックの企画を用意し、好評を博しました。

た。

「救命救急体験会」では、附属病院救急部に協力いただき、先生の講義をしていただいた後、医学生とともに市民の方にBLS (Basic Life Support) を体験していただきました。

組織学実習室では、毎年恒例の東洋医学研究会(東医研)による研究展示の他、実行委員企画として、一般に、あまり知られていない「法医学」のパネル展示も行いました。今年の東医研は『陶香源(とうかげん)』というテーマで、ハーブの効用などについての展示が中心でした。毎年東医研を楽しみに医学展を訪れる人がいらっしゃいますが、今年もその期待を裏切らないものでした。さらに、新たな試みとして、土曜日に学生団体 IFMSA によるワークショップが催されました。

「市民講演会」は、今年も北大医学部の先生方にお願いしました。福田諭教授による『耳鼻咽喉科・頭



東洋医学研究会の展示



市 民 検



当日の医学部前



救命救急体験会

頸部外科～最近の話題』と安田和則教授による『膝はお元気ですか？』の2講演が行われ、ともに大変わかりやすいお話を、講演後には活発な質疑応答がみられました。

また、土曜日の午後に「特別講演会」として、『がんばらない』の著書で有名な諒訪中央病院（長野県）の鎌田實先生にお越しいただきました。会場は満席。1時間半以上にわたるお話を目を潤ませている方がいらっしゃったのが印象的でした。

その他、マギー審司さんによるマジックショーもあり、軽妙なトークと楽しいマジックを披露していただきました。ステージは2回ありましたが、会場に人が入りきらないほどの人気ぶりで、子供から大人まで大爆笑でした。医学部前のロータリーでは、

医学部の部活・サークルによる模擬店が並び、にぎわっていました。

医学展の運営にあたっては、不慣れであったために、事前の宣伝活動を始めいろいろと反省すべき点がありますが、大勢のお客様にいらしていただけことができ、また学生同士の連帯感が深まったということで、成功であったと思っています。

医学展の開催にあたり、同窓会、学友会、各講座など多くの皆さんに多大なご支援をいただきました。また、教務掛の方々には非常にお世話になりました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。後輩たちが作る、来年の医学展にもご注目ください。

（顔写真は医学展パンフレットより転載）

医学部学生教育ワークショップ報告

医学教育開発室室長 医学部附属病院総合診療部 教授 前沢 政次



医学教育改革が嵐のように日本に吹き荒れている。嵐という表現は適切でないかも知れないが、全国の医科大学・医学部は精力的に改革を進めていることはまちがいのない現実である。

医学部学生に対して膨大になった医学知識の伝授のみで果たしてよいのかという疑問が投げかけられるようになった。また、人口の少子高齢化や医療経済など社会の変化も急激で、医療人に対する国民の要望も厳しさを増している。ましてマスコミがこれでもかこれでもかと医療ミスに対する厳しい追及の手を緩めることはないでおさらのことである。インフォームドコンセントやカルテ開示など医療の世界に対して透明性を求めていた。医師に対してもさまざまな期待が寄せられている。

個々の大学では課題探求・問題解決型学習の導入、精選と統合を旨としたカリキュラムの組み直し、選択科目やフリー・クオータ制の積極的導入、卒前臨床実習のクラークシップ化（見学型実習から診療参加型実習へ）など、それぞれの教育理念に従って改革が行われている。教育の成果に関する正確な測定はしばらく先のことであろうが、学生から歓迎されていることは事実である。

しかし個々の大学の努力のみでは限界があり、医学教育改革を全国レベルで推進することが求められ

てきた。

そのため「医学教育モデルコアカリキュラム—教育内容ガイドライン—」が医学における教育プログラム研究・開発事業委員会から提言された。臨床実習前に学生は基本的医学知識を習得し、患者・家族とのコミュニケーションが十分取れるような教育を受ける。そして全国共通の試験に合格した者が臨床実習を行うことになった。これは共用試験と呼ばれ、コンピューターによる知識の試験とOSCEによる技術・態度を評価する試験から成っている。

北大医学部でも平成7年から学部一貫教育を実施してきたが、共用試験を前提としたコアカリキュラムにそぐわない面もある。そこで今回のFDは全国的なカリキュラム改革に合わせ、かつ北大独自の特色ある医学部学生教育プログラムを設計することとして、第6回北海道大学医学部学生教育ワークショップを開催した。テーマは「コアカリキュラムを踏まえた新コースの設計」である。

平成14年8月17日(土)9時大学発のバスに乗り込み、夕張市ファミリースクール「ひまわり」に向かった。バスの中から自己紹介やゲーム感覚で討論仲間のグループ命名が始まった。トリプルA、ブレインセブンなどユニークなグループ名が誕生した。教員29名、学生3名、事務職員4名の参加である。

ひまわり到着直後のオリエンテーションからカリキュラムをめぐっての議論が白熱。自分たちの受けた知識偏重の教育で悪い医者ばかりが育ったのか。統合カリキュラムでのコーディネーターはどうだっ

たのか。内科はさまざまな工夫で成果を上げているぞ。昼食後ワークショップ(WS) I 「コアカリキュラムのメリット・デメリット」を開始した。学生の立場から、教員の立場から、患者・国民、行政の立場からとさまざまな問題点が出された。KJ法も議論の題材の発見に有用であった。WS II 「抜本的なコース改革を提言しよう」では全人教育を柱に。応用人間生物学の提案、臨床医は育っても基礎医学者は育つか、学士入学者は、ECE の充実、コアと選択をいつ、どのように組み合わせるか、解剖学組織学を2年生の頭に、あるいは3年の頭に持っていく、医学概論の充実、基礎臨床統合カリキュラムの活用などユニークな意見も出てきた。

夜は井上副学長から独立行政法人化をめぐっての解説をいただき議論した。その後アルコールもあり、「ほろ酔いディベート：医学部におけるAO入試は賛成・反対」も盛り上がりを見せた。

18日(日)は WS III 「新コースでのカリキュラムプランニング」循環器系、内分泌系、神経系の3グループに分かれて基礎臨床統合コースのカリキュラム作成を行った。一般目標、個別行動目標、方略についてのシラバスを作る作業である。チュートリア

ルで学生にショックを与える、授業の一部には内科外科ばかりでなく、疫学や予防医学を取り込む、リハビリテーションも入れてみるなど斬新なデザインが作られた。

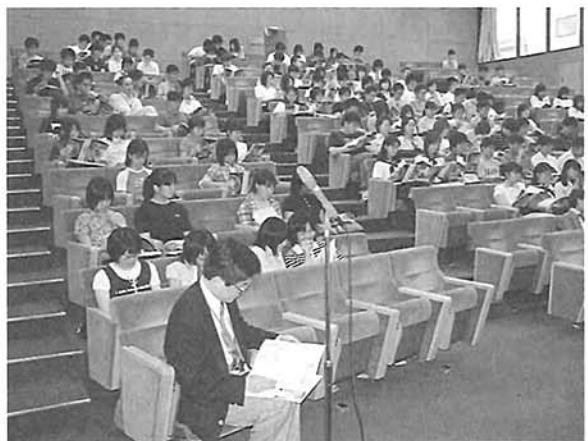
1泊2日の忙しいワークショップであったが、参加者の熱意で充実したものになった。基礎系の参加者が少なかったことは残念である。タスクフォースも阿部和厚名誉教授の穴を埋めるべく、奮闘された寺沢・吉岡教授、近藤・大滝助教授に感謝したい。また、資料準備や下見、実際のお世話などご尽力いただいた事務部の皆様に深謝したい。



お知らせ

◆ 北大オープンユニバーシティ・体験入学について ◆

去る8月5日(月)北大企画によるオープンユニバーシティが開催され、医学部では、午前及び午後の2回開催し、学部長の挨拶の後、各分野の協力を得て研究室見学を実施しました。今年度の参加者は、午前118名、午後56名、合計174名が参加しました。このうち道外からの参加者が50名に達し、質疑応答では、北海道での生活に対する不安や、北大医



学部の先端医療に関する質問等があり、応答した教官は、午前・午後を合わせて延べ22名に及びました。

また、参加者のアンケートでは、研究室の現場及び病院での最先端の治療機材等を直に見学でき、医学部が多様な英知の集合体であることが理解でき、医学部入学への夢を膨らませることができました。これから勉強を頑張りたいとの感想が多くありました。

また、8月6日(火)午前10時から体験入学が開催され、井上芳郎教授による模擬講義が行われました。

この体験入学は、事前申し込み制となっており、定員100名に対し109名の申し込みがあり、参加者は、熱心に医学部で行われている解剖学のミニ講義に聞き入っていました。

講義終了後も、参加者から人体の謎に対する質問が多くあり、質問の順番待ちの列ができたため、講演者は、時間を過ぎてもひとりひとりに丁寧に応答しておりました。

◆ 医学部学生教育ワークショップについて ◆

8月17日（土）・18日（日）の2日間にわたり、第6回医学部学生ワークショップが“夕張ファミリースクールひまわり”で開催されました。

今年度は、「コアカリキュラムを踏まえた新コースの設計」をメインテーマに取り上げ活発な意見交換がなされました。

西 研究科長がプロデューサーとなり、前沢教授ディレクターの下、4名のタスクフォースの先生を含め27名の教官、3名の医学生及び5名の事務官による総勢35名の参加者となりました。

初めての参加者からは、週末を返上しての参加に苦言が飛び交っておりましたが、ワークショップが進むにつれ、学生教育についてみんなが真剣に取り組んでいること。また、普段会話のない分野の先生と親しくなれたこと。さらに、夜のディベートでは、隠れた一面を垣間見るなど、厳しいスケジュールの中でも楽しい雰囲気となり、ワークショップが終了するころには、有意義な体験をしたとの声があちらこちらからこだましておりました。

◆ 医学部卒業試験日程 ◆

今年度の卒業試験は、臨床実習が終了し自主演習を終えた9月10日（火）から始まりました。試験期間は11月20日（水）までとし、11月25日（月）には、

卒業試験の締めとしてオスキー（O S C E）を実施する予定です。

◆ 医学部学士編入学について ◆

平成15年度学士編入学（定員5名）出願受付を7月8日（月）から12日（金）まで行い、350名の願書を受理しました。定員に対する志願倍率は70倍となりました。

選抜方法は、第一次選抜で筆記試験「生命科学総

合問題」、第二次選抜で筆記試験「課題論文」及び面接試験が課せられました。

最終合格者の発表は、9月6日（金）に行われました。

◆ 医師国家試験の案内について ◆

第97回医師国家試験の施行が官報に掲載され、試験日程等は、次のとおりとなりました。

- ・出願期間：平成15年1月16日（木）～1月31日（金）
- ・試験日：平成15年3月15日（土）～3月17日（月）
- ・合格発表：平成15年4月24日（木）午後2時

なお、在学生の受験願書等は、12月上旬に厚生労働省から大学へ一括して送付されます。

また、第95回の試験から試験内容が変更になっております。冊子「平成13年度医師国家試験出題基準」が若干部、教務掛にありますのでご利用下さい。

◆ 平成15年度大学院医学研究科（博士課程）入学試験について ◆

平成15年度大学院医学研究科博士課程の入学試験日程は、前期試験および後期試験の2回に分けて施されております。

前期試験は、平成14年8月5日（月）から8月9日

（金）までの出願期間で、9月11日（水）に実施されました。合格発表は、9月20日（金）に行われました。また、後期試験日程は、以下のとおりです。

出願期間：平成14年12月16日（月）～12月20日（金）

試験日：平成15年2月5日（水）

なお、外国人留学生の場合は、翌日2月6日（木）

にも、日本語の試験が実施されます。

合格発表：平成15年2月28日（金）の予定

◆ 平成15年度大学院医学研究科医科学専攻（修士課程）入学試験について ◆

平成15年度大学院医学研究科医科学専攻（修士課程）の出願期間は、平成14年7月29日（月）から平成14年8月2日（金）まで、入学試験は、平成14年9

月9日（月）に行われました。

合格発表は、平成14年9月20日（金）に行われました。

◆ 医学研究科・歯学研究科合同慰靈式 ◆

医学研究科・歯学研究科では、9月27日（金）午後1時30分から医学部基礎大講堂において、この1年間医学・歯学研究のため尊いご遺体を捧げられた169体の御靈のご冥福をお祈りする慰靈式が執り行われました。

慰靈式には遺族、来賓、総長、副学長、関係部局長、教職員、学生等が参列しました。参加者全員による黙祷が行われ、医学研究科長・歯学研究科長から追悼の辞が述べられた後、参列者による献花を行い、厳粛のうちに慰靈式が終了いたしました。

◆ 平成14年度科学研究費補助金採択状況 ◆

金額単位：千円

年度別 研究科目	11		12		13		14		備考
	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額	
地域連携推進研究費			1	23,800	1	21,000	1	21,000	12年度新設
特定領域研究(A)	9	70,200	1	3,500	3	7,600			13年度で廃止
特定領域研究(B)	3	39,800	2	20,000	2	20,000			"
特定領域研究(C)			4	16,200	7	31,000			"
特定領域研究							10	48,200	従来の特定領域研究(A・B・C)を統合
基盤研究(S)					1	37,600	1	11,500	13年度新設
基盤研究(A)	9	79,800	7	44,500	5	65,676	4	64,200	
基盤研究(B)	34	167,700	33	170,272	34	174,700	38	186,700	
基盤研究(C)	27	36,710	25	42,547	24	36,100	22	36,299	
萌芽的研究	15	15,200	17	18,200	19	18,600			13年度で廃止
萌芽研究							16	28,600	14年度新設
奨励研究(A)	10	11,500	12	14,000	8	7,200			13年度で廃止
若手研究(B)							7	12,400	14年度新設
計	107	420,910	102	353,019	104	419,476	99	408,899	

採択率（新規・継続を含む）：11年度 35.0%、12年度 32.5%、13年度 33.8%、14年度 37.7%

※ 11～13年度の採択状況は最終実績。14年度は9月1日現在の採択状況である。

◆ 学会日程等 ◆

*学会名 ①担当分野、②開催年月日、③開催場所、④トピックや目的

*日本救急医学学会総会・学術集会

①侵襲制御医学講座 侵襲制御医学分野

②2002年10月9日（水）～11日（金）

③ホテルロイトン札幌

④“救急医学30年の歩み”～検証と展望～

【特別講演】「宇宙から見た危機管理－国際宇宙ステーションの意義－」毛利 衛（日本科学未来館 館長）

【招請講演】1) Neuroprotection Research: Advances and Retreats. David S. Warner (Duke University)

2) Endogenous Modulators of Sympathetic Neural Activity in the Heart: Their Relevance to

Arrhythmias and Sudden Cardiac Death. Roberto Levi (Cornell University)

3) A Role of Activated Protein C in SIRS, Sepsis, and MODS. Marcel Levi (University of Amsterdam)

4) Techniques for Improving both Atrial Fibrillation Cardioversion and Ventricular Fibrillation Defibrillation. Gust H Bardy (University of Washington)

*日本小児感染症学会

①生殖・発達医学講座 小児発達医学分野

②平成14年11月8日（金）～9日（土）

③ホテルロイトン札幌

*第36回日本側弯症学会

①機能回復医学講座 運動器再建医学分野

②2002年11月14、15日（木、金）

③ホテルロイトン札幌

④本学会は脊柱側弯症をはじめ脊柱変形全般の診断・治療の進歩を目的とした学会です。過去、北海道大学整形外科の松野誠夫教授が昭和48年、同金田清志助教授が昭和59年に主催しており、札幌での開催は3度目になります。

このたびの学術集会では、主題に『脊柱矢状面の配列異常』を取り上げます。また、海外から4名のguestspeakerの講演を予定しています。

編集後記

前号から編集委員を拝命しております。医学研究科・医学部の情報交換・交流の場として重要な広報編集の重責に身が引き締まっております。

本号では、西研究科長から「大学評価・学位授与機構の分野別研究評価」、前沢教授から「学生教育ワークショップ」、木佐君からは「医学展」についての記事をいただきました。これらは、研究、教育、社会貢献（社会勉強）と、いずれも医学研究科・医学部の今後のあり方に関わるもので、こうして並べてみると、今後に向けて「何か明るい兆し」が見えてくる気がするのは私だけでしょうか。

これからも広報編集を通じて、教官、学生、職員、そして世代の垣根を越えた前向き・活発な活動、議論のお手伝いが出来れば幸いです。

よろしくお願ひ申し上げます。 (小橋 元)

—— Home Page のご案内 ——

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003

編集委員 有川二郎、岩崎喜信、田中淳司、
小橋元、佐藤松治